



ピクタインダオン

(おさみがりにぼし)

第 26 号

発行日 2020年6月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

水 3

雨が降りはじめ

三日目の朝

収まりきれない水の塊が

川の肩を突き破った

溢れた水は

にがい心のように翳ふかく

河川敷の公園は

上流からの漂流物でいっぱいになった

雨後

ただ黙然として

漂流物を片づけていく下流の人びと

やがて 川は

ゆるやかな水の匂いをまとい

もとの姿に

霰

踊っている

陽が射し

幕が下りた片隅で

しやがみつづけている

霰

そつと

掌にのせると

きらめき

ふるえている

やがて

心地よく

とけていく

時間

母の掌の

ぬくもり

小さい地球に

黒ずんだ空から

幾万の霰が^{あられ}

無邪気な子どものように

駆けてくる

ぱちぱちと

落ちたところが

霰の座

雨樋の溝

自転車の荷台

むく犬の背中

じんわりと

白にコーティングされた

舞台では

可愛い妖精たちが

青空が
映っている
わたしも
映っている



水
4

二階の

窓から眺める

雲のグラデーション

重くたれこめ

かなしみ色のような

空

ふいに

踵で床を叩きつける

激しい音

みぞれ

窓にもたれながら

水がね色に

沈んでゆく町に

光のみえない

孤独を

かさね合わせていた

みぞれは雨にかわった

窓ガラスの頬をあらう

水のワイパー

しずくは

うるおう真珠の首飾り

視界が明るんで――

雨があがった

やがて

並木の

みずみずしさに呼応する

子どもの声

空の水たまりには

四月の
魚が泳いでいた

聞香

未知のことばの香――

切り開けないでいる
噛みくだけないでいる

草深い小径

その先に

なにかあるのだろう

見えない風景を

この瞳で確かめたい

斥候

不安をかきたてる音に足を止めた

瞬間

眼前に一匹のスズメバチ

殺気立つ眼

黄褐色の毒針キラ―

おびえながらも

じつと動かず気配を消す

虫よけの強烈な臭いのせいか

敵とはみなさなかつたからか

斥候はあつさり消えた

透明な静けさのなか

木漏れ日が

ふいにやさしく沁みた

緑のにぎわい

いつのまに青青と――

毎日

眺めていたはずなのに

ふいにあらわれた櫨並木の

緑のにぎわい

いままでの

がらんとした寂しげな並木とは違い

つややかな若葉がひしめき

枝々に生命がみなぎっている

なにを見ていたのだろう

やさしい季節から眼をそらして

そのあいだも

櫨は五月の光を浴び

緑をよみがえらせていた

四方にのびた万朶の櫨

薄緑に萌えた幾万の若葉

風にそよぎ

手話のように葉末をゆらしている

呼びかけにこたえると

葉群れの青い波が大きくうねった

いま

風のささやき

梢のつぶやき

が見えてくる

徒然のエチュード 23

①

A きれいな青空ね

B どこが？

A サングラス外して見たら……

B わあ まぶしい！

A 太陽光は

武漢コロナも殺菌するのよ！

②

雨が小粒の真珠なら♪ (橋幸夫)
雹は一〇〇カラットのダイヤモンド

③

遠距離恋愛

体は離れていても

食べる物は

一緒

心はひとつ
♥

④

血圧が高い！

でも

食欲はある

大丈夫だ！

食べて

食べて

血圧もぶっ飛ばそう！！

⑤
しつかり噛んでください

イタイ!!

と 歯科衛生士

大丈夫ですか？

と わたし

⑥
スマホが熱くなる
いつも

決まって

夏子嬢と話す

スマホが興奮するらしい

なぜ？

⑦
いま なにやってるの？

ポポポポだよ

なに それ？

一にポエム

二にポエム

三にポエム

四にポテトチップス

⑧
もうすぐ70歳

なりたくない!!

一足飛びに80だ!

【あとがき】

そのまんま讃（抜粋）

倒れたのは一年前の四月。いまだに遅い回復に焦りを感じている。おそらく健康寿命は、あと十年くらい。停滞している暇はない。

*

小泉吉宏氏の詩「そのまんま讃」と出会った。
〈そのまんま〉とは、そのまんまを受け入れ、そのまんまに生きること。その言葉がストンと胸に落ち、わたしのターニングポイントとなった。
どんなときも詩の言葉は、わたしを救う。

悟ってしようと
悟ってしまいと
そのまんま
泣いてそのまんま
笑ってそのまんま
歩いてそのまんま
立ち止まってそのまんま
友と語ってそのまんま
子どもが生まれてそのまんま
父が逝ってそのまんま
母が逝ってそのまんま
友が逝ってそのまんま
行きも帰りもそのまんま
泣きたいときは泣けばいい
笑いたいなら笑えばいい

泣くときはしっかりと泣き
笑うときはしっかりと笑い

.....

騒ぐ心に目をやると
心の正体見えてくる
見られた心はかたちなく
確かなものはどこにもない
ふりまわすのは心なのか
ふりまわすのは自分なのか
心は自分ではなく
自分は心ではない

.....

ただけがただそのまんま
そのまんまに気づき
そのまんまを知り

そのまんまを喜び

そのまんまの覚悟が生まれ

そのまんまを生きる

今ここがそのまんま

そのまんまがあるだけ

そのまんまを生きるだけ



【ご案内】

第七回「ピッタの会」勉強会

当初四月十二日に開催を予定していた「ピッタの会」は、ようやく九月開催の運びとなりましたので、ご案内いたします。

講師に保坂英世氏をお迎えし、演題は、「私的詩への取り組み方」です。

質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時 九月六日（日）

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 定員二十名まで。事前申し込み必要。参加希望者は八月三十一日（月）までに、

矢代レイにご連絡ください。

☎090・1935・1180

なお講座室利用にあたり、あきた文学資料館より、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための諸注意と協力依頼がありました。

- ① 発熱や咳等風邪の症状がある方は、利用しない。
- ② 手洗い、マスクの着用。
- ③ 座席の間隔を空けるなど、「三密」に気をつける。
- ④ 講座室での飲食はしない。ただし、熱中症予防の水分補給は可。必要な方は、各自ご用意ください。
- ⑤ 感染経路を確認するため、参加者は「連絡先一覧表」に氏名、連絡先をご記入願います。

万が一にも、また、開催の延期・変更が生じたときは、参加申し込みの方には、その旨をご連絡いたします。

参加される皆さまには、ご理解とご協力のほど、よろしく願っています。